

J R 東日本 地方路線収支公表 福島県内 4 路線 9 区間で赤字 乗客 2,000 人未満

「J R 東日本は 28 日、利用者の少ない地方路線の収支を初めて公表した。2019 年度実績で 1 日当たりの平均乗客数（輸送密度）が 2,000 人未満の 35 路線・66 区間が対象で、福島県内では水郡線、只見線、磐越西線、磐越東線の 4 路線の計 9 区間が該当した。66 区間全てで収入から費用を差し引いた収支が赤字だった。J R 東は経営状況の厳しさを示すデータを公開することで、国や自治体と存廃を含めた路線の在り方を巡る協議を進めたい考えだ。

J R 東は、新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言が発令された 2020 年 4 月以前となる 2019 年度実績を基準にした。鉄道が持つ大量輸送の特性を測る一つの目安となる平均乗客数 2,000 人を下回った路線・区間を公表対象とした。

東京電力福島第一原発事故の影響で当時未再開だった区間が含まれる常磐線いわき一原ノ町間、新潟・福島豪雨による被災で不通となっている只見線会津川口―只見間は除外した。

赤字額は、水郡線磐城塙―安積永盛間が 10 億 400 万円、磐越西線野沢―津川間が 9 億 5,600 万円、同線喜多方―野沢間（8 月 3 日の大雨で代行バス輸送）が 7 億 9,800 万円の順に多かった。

営業費用に対する運輸収入の割合を示す収支率でみると、只見線会津若松―会津坂下間が 17.4%で、全 66 区間で最高だった。磐越西線会津若松―喜多方間は 16.4%で 2 番目に高かった。水郡線磐城塙―安積永盛間は 12.2%だった。一方、県内の残る 6 区間は全て 5%台以下で、磐越西線野沢―津川間の 1.3%は公表区間全体で 5 番目に低かった。

100 円を稼ぐためにどれだけの費用がかかるかを示す営業係数は、収支率の最も低い磐越西線野沢―津川間の 7,806 円に対し、収支率の最も高い只見線会津若松―会津坂下間は 573 円だった。66 区間全体の赤字額の合計は約 693 億円。区間別の赤字額は羽越線村上―鶴岡間の 49 億 900 万円が最も大きかった。

28 日に記者会見した J R 東の高岡崇執行役員は公表目的について「厳しい経営状況を知ってもらい、持続可能な交通体系に関する建設的な議論をしたい」と説明した。

その上で、66 区間について「鉄道は大量輸送が大前提で、その特性が発揮できていない」との認識を示した。「赤字だから即廃止という類いではない」とした一方、「鉄道が最適な輸送方法でないと考えられる区間があるのも事実。運営の仕方や場合によっては輸送方法も含めて議論したい」と述べた。

国土交通省の有識者検討会は 25 日に、鉄道会社や自治体が経営が厳しい地方鉄道の存続策やバス転換などを検討するよう促す提言をまとめている。J R の路線・区間の協議対象は輸送密度が 1,000 人未満などを目安としている。只見線の不通区間・会津川口―只見間は県が線路や駅舎を保有し、J R 東が運行を担う「上下分離方式」を採用して、10 月 1 日に全線再開が決定している。（「福島民報」2022 年 7 月 29 日号付け）



【福島県内の JR 東日本在来線の線区別の利用状況 (2019 年度実績)】



【10月1日に全線開通予定の只見線（会津川口駅）】



【会津川口駅⇄只見駅間の代行バス（9月30日で役目を終える）】